

6. 本年度事業の総括

化学と一口に言っても、学術研究的な立場から見た技術と、産業実務面として必要な技術レベルは大きく異なる。また、後者においても、例えば、電子材料、モビリティ、エネルギー、食品、医療、バイオ、環境等の分野間でも、必要な専門技術は異なっている。化学が我が国発展の基盤を支える重要な分野にも関わらず、社会人の学び直しという観点で他分野よりも遥かに教育の場の整備が進んでいないことは想定していたが、企業へのアンケート調査や先行事例の調査において、その問題点は明らかになった。

このような観点から見ると、キャリアアップのための専門技術の高度化に関する再教育のプログラム化については、分野横断的に共通項を見出すことは困難を極める上に、そのニーズに関しては、各調査においても重要視されているとは言い難く、さらに時間をかけて検討する必要がある。それよりも、本事業の各種アンケートや実証講座でも見られたように、基礎基本の重要性を認識しながらも、就業後ほとんど再教育の機会に恵まれない化学系技術者に対し、自信を持って職務に臨めるような、かつ分野横断的なプログラムの策定に注力すべきではないかと実感する。

また、キャリアチェンジのための再教育についても、すでにそのニーズがあることは、本校への社会人入学者の比率の高さからも想定しているが、その背景にあるのは、高等学校教育段階での文理選択の早期化が挙げられる。つまり、基本的には大学入試を目標に、高二段階で多くはその選択に迫られるが、そこで職業までを意識して選択できているかと言うと、決してそうではない。文系を選択しながらも、高校や大学の卒業段階に来て職業を意識した時に、また、社会人となって以降、自分の職業に疑問を感じた時に、理系分野・化学への思いが再燃し、例え遠回りになっても、平日働きながらも本校へ再進学を志望する入学者は存在する。

以上のことから、キャリアアップ、キャリアチェンジ両面において、さらに分野横断的に活用可能なプログラム開発に臨みたいと志向する。また、このような活動を通して、社会人の学び直しは当然のことながら、学び直しの直前時期にも活用でき、さらには義務教育や後期中等教育段階で言われる理科離れにも貢献できるような教育の提供も検討したい。

最後にご指導いただいた文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課専修学校教育振興室の皆様を始めとして、今回の事業にご参画、ご支援をいただいた各種団体、委員の皆様、各種調査にご協力をいただいた企業や卒業生にも感謝の意を表したい。